説教20200628ルカ17：11-19　　21-202　21-171

「感謝と賛美」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　先日、ある児童養護施設に説教をしに行く機会を与えられました。そこで私は「子供たちを私のところに来させなさい」の聖書箇所のお話をしました。イエス様は人々に触れて、人々の頭に手を置いて、人々から悪霊を追い出し、足を立たせ、癒されました。そこには人と人との触れ合いが不可欠なことととして記されています。児童養護施設の子どもたちは人と人との触れ合いが、愛情をいただくためになくてはならないことを、肌身で知っていますので、イエス様が道端で多くの人々に触れ回ったことを、素直に受け入れることができました。ところが、今の大人たちはどうでしょうか。それは私たちのことですが、今のご時世に道行く人に後ろから近づいて、その服のすそに触れてしまったら、その触れた人はみんなから寄ってたかって非難されかねません。このような今の世には、確かに何かが足りないように思われます。私は今の世に足りないのは「感謝と賛美」だと思います。それはどういうことかと申しますと、例えば、今、テレビなどの報道で私たちは、昨日の新規感染者数ということは繰り返し聞かされます。昨日は１００人の新規感染者が出て、その前の日より３０人増加しました、というように、事細かにそれは報道されて行きます。しかし、よく考えてみれば、病から回復された方とか、退院された方の数はほとんど報道されていないように思われます。ましてや、この病を克服した人を採り上げて、直って良かったですねと言うように報道されることは皆無だといって良いでしょう。このように今の報道が、新規感染者ばかりを強調し、直った人に対してこのようにとても冷たいのはなぜなのかは分かりませんが、私たちが、このようにある意味、偏った報道の言葉を日々受けているということは、認識しておいたほうが良いと思います。

　本日読まれました聖書箇所も、当時伝染病と思われていた、重い皮膚病を患った人々について記されておりますので、時代は違いますが、今、申し上げたことと類似点があります。その類似点に留意しながら本日の聖書箇所に聞いてまいりたいと思います。

サマリア人といいますと、私たちは良いサマリア人のたとえ話を思い出すでしょう。祭司やレビ人たちは、道端にうずくまっている怪我人に触れないようにして通り過ぎたのですが、よいサマリア人は彼を介抱して、宿屋まで送りとどけたのです。祭司やレビ人というのは正真正銘のユダヤ人であり、一方のサマリア人といいますと、ユダヤ人と異邦人とが混血した、そのどっちでもないというような、いわば境界線にある人たちでした。サマリア人のそういった性格ゆえに、聖書ではサマリア人はよく採りあげられ、今日の聖書箇所でも境界線にあるサマリア人の姿が描かれています。サマリア人はユダヤ人の社会に暮らしながらも、どこか受け入れられていないといった葛藤を抱きつつ日々を送っていたことでありましょう。

　今、正真正銘のユダヤ人と申しましたが、こう言った意識を、時のユダヤ人たちは持っておりました。自分たちこそ、神から選ばれた正真正銘のユダヤ人だという自負をもって日々を送っていたことでありましょう。そして、その自負といいますか自信を支えていたのが、自分たちが聖書の律法を完璧に守っている者たちであるという認識だったのです。その聖書の律法というのは、基本が十戒になりますが、それから導き出された、日々守るべき規則や細則が、申命記やレビ記などに事細かに記されております。

今日の聖書箇所の１２節に「ある村に入ると、重い皮膚病を患っている１０人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、」とあります。「遠くの方に立ち止まったまま、」という態度には、レビ記にある律法の規定が反映しています。レビ記１３章４５節からがそれです。旧約聖書１８１ページの最後からになります。お読みします。「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。 」 ここには、病の伝染を避けるのに必要な措置が記されています。重い皮膚病にかかった病人は「わたしは汚れた者です。汚れたものです」と呼ばわらねばならない規定があったのです。そしてその人は一人で宿営の外に住まねばならないという規定があったのでした。これらの規定を念頭に置けば、この１０人が「遠くの方に立ち止まったままで」、イエス様に近づけなかった理由がわかるかと思います。これらの律法の規定はこの１０人の心に深く根を張り、彼らの行動を規定していたのでした。「一人で宿営の外に住まねばならない」とはなんと恐ろしい事でしょうか。ですからこの１０人は何としてでも、この重い皮膚病から癒されたいという一心で、まさにわらにもすがる思いで、「イエス様、先生、どうか私たちを憐れんでください」と声を張り上げて、イエス様に憐れみを求めたのでした。

そしてこのように、イエス様に憐れみを求める人はみな救われます。そのとおり、この１０人ははみんな重い皮膚病から癒されて、イエス様によって清くされました。１４節でイエス様が「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と命ぜられたのも、全く先ほどのレビ記の文脈に則っています。旧約聖書１８２ページからのレビ記１４章には、重い皮膚病が直った人が、祭司から受けるべき「清めの儀式」の次第が事細かに記されています。たとえばレビ記１４章８節には次のように記されています。「清めの儀式を受けた者は、衣服を水洗いし、体の毛を全部そって身を洗うと、清くなる。この後、彼は宿営に戻ることができる。」このようにしてこの１０人は祭司から清めの儀式を受けて、晴れて宿営のうちに戻ることができたと思われます。

　この１０人はレビ記の規定の通り、又ユダヤ人社会のうちに受け入れられ、そこでの生活に戻ることができたのです。その社会に戻れた時の安ど感は、察するに余りあることであったでしょう。同様にレビ記の規定によりますと、重い皮膚病に係っている人たちは、健常者から常に５０ｍほど離れていなければならないという規定もありました。

　旧約聖書になぜこのような規定が記してあるのか、安易なことは言えませんが、ある註解書には、レビ記の記述というのは、それを読む者に、「主なる神よなぜですか、そして私たちはどこへ向かえばよいのですか」ということを考えさせるためのものだというように書いてありました。確かにレビ記を読んだ私たちは、深く考えさせられます。そして、主イエス・キリストの父なる神は、私たちをどこへ向かわしめようとされているのかに思いを致します。

　レビ記にはなぜこのようなことが記されてあるのでしょう。主なる神は私たちをどこに向かわしめようとされているのか。その答えを、この戻って来た一人のサマリヤ人が証ししてくださいます。このサマリア人は、大声で神を賛美しながらイエス様のところへ戻ってきて、イエス様の足もとにひれ伏したのでした。このサマリア人が宿営のうちに戻されたかどうかは記されておりませんが、ともかく、このサマリア人は宿営に戻ることの安堵感に、はるかに勝る喜びを得て、イエス様に駆け寄って、そしてひれ伏して感謝を捧げたのでした。そしてイエス様に賛美を捧げたのです。

　わたしたちもこのサマリア人のように日々、イエス様を賛美礼拝しているクリスチャンですので、このようにこのサマリア人のことをお話しますと、サラっと当然のこととして聞いてしまうかも知れません。しかしレビ記の律法に一挙手一投足までも縛られて生活している残りの９人の事を思えばどうでしょうか。実は私たちはこの９人がとった行動も分からないではないと思います。私たちは、冒頭に申しましたように、この地上での歩みにおいては、時に偏った報道の言葉の洪水に巻き込まれることもあります。そのような洪水の渦中にあっては、私たちは、知らず知らずのうちに、恐怖心に支配されて、感謝と賛美を忘れてしまいます。そのような中では、何時まで経っても、何か病気になることが悪い事のように思われてしまいます。自分を癒してくれたのは、他ならぬイエス様であること、それは隠れもない事実であるのに、そのイエス様に感謝と賛美を出来ないことがあります。

イエス様は、病いの人にこそ格別の憐れみをお与えになられる方です。イエス様は「時は満ち、神の国は近づいた」といってこの地上に来てくださいました。このサマリヤはこのイエス様の言葉をそのとおり受け入れて、神の国へと歩まされていることを、身を持って証しているのです。

　さて感謝と賛美といえば詩編１５０篇にその最たる様子が記されています。旧約聖書９８９ページになりますが、角笛を吹いて、琴と竪琴を奏でて、太鼓に合わせて踊りながら、弦をかき鳴らし笛を吹いて、、シンバルを響かせて、というようにその賛美の様子が記されていますが、実際にこのようなオペラ歌劇のような賛美礼拝は、新しいエルサレムに入れられるまで、ありえないんじゃないかと思われてきますね。でも想像するだに、こんな風にしてイエス様を賛美できれば素敵ですね。私たちは、教会での賛美礼拝の最終目標をこのような詩編１５０篇の姿に見出したいと思います。そのためには、教会にはたくさんの人たちが集められることでしょう。今、未だイエス様のこの福音を信じていないという方もおられるかも知れません。私はそのような方にはこの聖書の詩編の各編を読まれることをお勧めします。詩編には、私たち人間が日々の生活において抱く悩み、苦しみ、怒り、そして絶望、又、喜び、楽しみ、悦楽、そして悲しみなど、およそ人間が味わう情念のすべてが網羅されているといってよいでしょう。私たちは、そのような喜怒哀楽に満ちたこの地上生涯で、先ず、主なる神に、知恵を見出します。主なる神は万能で知恵に満ちたお方であると。それから次に、主なる神は信頼するにたるお方だということに気づかされるでしょう。それから主なる神は私の罪を赦してくれるお方、助けてくださいと言えるお方、憐れみ慰めて下さるお方、そして感謝して賛美を捧げたくなるお方、というように段々と主なる神に対する信仰が深まってくることでしょう。そして私たちは詩編の最終章である１５０篇に行きついたなら、声をそろえて、高らかに主なる神を共に賛美する永遠の喜びの時を持ちたいと願います。

お祈り致します。

天に居ます私たちの父なる神様、今日はこの兄弟姉妹たちをここに集めて下さり、共にあなたを賛美礼拝することができますことに感謝いたします。ここ湯布院教会では、隣に聖愛保育園があり、子供たちがあなたの愛に抱かれて日々暮らしています。そのことに感謝しますとともに、そこに暮らす者たちがますますあなたの愛に抱かれて、あなたのことを信頼し、寄りすがっていくことができるようにして下さい。あなたに向けて私たちが賛美の歌声を高らかに上げていくことができるようにして下さい。

今、この地上では新型コロナウィルスによってたくさんの人が怯え、不自由な生活を余儀なくされいています。主よどうか私たちを憐れみ、すべての憂いから解放し、私たちに賛美の歌声を授けて下さいますように。

今、孤独を感じ助けを求めておられるお一人お一人のそばにあなたがいたまい、必要な癒しと慰めとを速やかにお与えください。

今日大分地区各教会で持たれております交換講壇の上にあなたからの豊かな祝福がありますように。ことに今、中津教会にてご奉仕されております、黒田恭介牧師の上にあなたからの格別の励ましと恵みがありますように。

父と聖霊と共に一体であって世々生き支配されておられます、私たちの救い主イエスキリストの御名によって祈り願います。